

血族結婚部落の優生學的調査概報(第一報)

新潟・長野縣境「秋山郷」調査

篠崎信男
青木尚雄

序言

一般にわが国には血族結婚が平均成員の五%程度存在すると謂われ、福田邦三博士⁽¹⁾に依れば特に農村の標本調査結果はイトコ結婚が一三%の高率を示し、又われわれの調査においても(東京都・埼玉県・和歌山県)農山村は七乃至一六%、都内においてさえ二%強のイトコ結婚が存在することが確かめられた。欧米の血族結婚率にあつては、Sanderson⁽²⁾に依るオランダの第四親等迄の血族の血族結婚が〇・〇〇〇五七%であるのは少な過ぎるとしても、ドイツの調査においては一%台であり、他の諸国も大体之に準じ、これ等の率に比しわが国の血族結婚率は著るしく高率であると云わねばならぬ。

単純メンデル劣性の遺伝形質が潜伏運搬者によつて子孫に伝承され、同系結婚によつてホモになり子孫に発現することがあるといふことは一般の定説である。このことは血族結婚の中には優秀素質もあるが、劣悪素質をも包含し、しかもその発現は前者に比して上廻るものがあり、かゝる劣悪素質の発現は優生學上無視出来ない問題の一つの示すものである。イトコ結婚で劣性遺伝病が現れる確率は理論上、共通祖先の片方がヘテロである確率が一なら $1/64$ 、又 $1/2$

なら $1/256$ の少数であるが(Stern⁽³⁾)の計算によつて明らかなる如く單純劣性形質の淘汰は甚だ困難で長年月を要するといわれる。(たとえ明白な遺伝病でなくとも、個々の遺伝因子の作用が綜合化されたものとして考えられる体構、体力において、血族結婚の子孫がプラスにせよマイナスにせよ遺伝的に何等かの影響を受けてゐることは当然である。)

この観点に則して著者の一人は先に山梨県西山部落⁽⁴⁾における血族結婚の優生學的調査を行つたが、これによれば著明な遺伝性疾患は二、三の精神病、骨疾患を除いては淘汰により既に消失してゐるにも拘らず、本来人体の構成たる体格においては、特に身長其の他の矮小化を来し(最大頭長のみ大)体力は總じて著るしく劣弱であり、一言にして云えば、生活には差支えないが(即ち主な遺伝病は淘汰されてゐるが)一般的体格において平均成員より優秀なる部分より劣悪なる部分が多く認められた。然し乍ら、前調査は、同様の血族結婚の実例調査文献が皆無のため、その眞実性を立証し得ず、又血族結婚の先天的影響については血族部落とその隣接部落との体格の「相對的」相違を示してゐるが、これは同一地域内の血族濃度の強弱による数段階の比較の方がより妥当であり、其の他必要なる觀察値及び家系的遺伝状態の検討を欠く憾みが認められた。このためには例えば本調査の如く或る河の流域に副つた血族結婚部落で、

その部落の発展消長の歴史沿革のよく知れた、換言すれば、各部落の新旧、血縁濃度の強弱の比較の出来る一群の血縁結婚部落の総合並びに小部落別の実態調査が望ましい。

本調査は前調査と同じく山人であるとの制約はあるが、敘上の理由により、昭和二十三年十月、血縁結婚に関する優生学的研究のために、新潟長野県境秋山郷血縁家系家族一七三名について行われたものである。

部落の概況

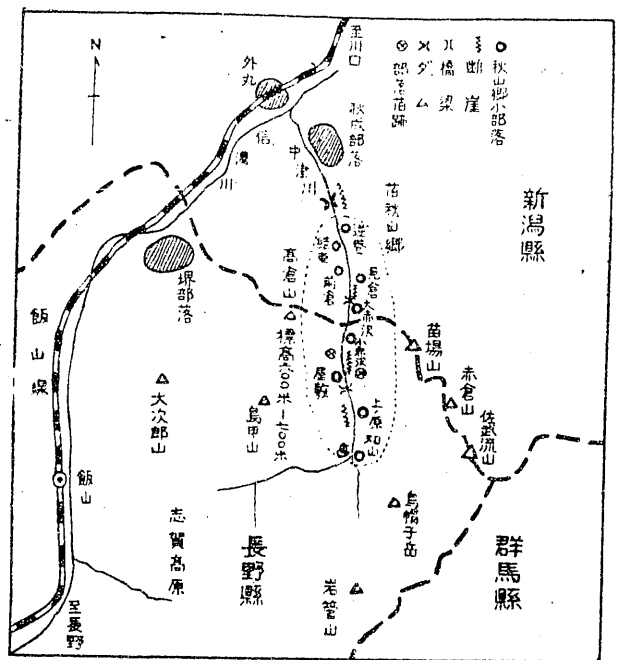
体格の成長については部落の地形、気候、栄養等が関与し、又、体質の遺伝については部落の家系、血縁濃度が影響するから、最初にこれらの概況を述べる。

(1) 部落の地形其の他

当秋山郷は信濃川の支流中津川の上流溪谷に沿い、南北約四里に亘つて、大は五〇戸、小は一戸合計九箇の大小部落が点在する山間の僻地である。以前は山間の一孤村として独立に存在したものが、明治三十二年町村制施行の際、北部四部落は新潟県中魚沼郡秋成村に南部五部落は長野県下高井郡境村に夫々分離併合されたものであるが、その生活において現在も夫々の同村内の平地部落と大いに異なる所がある。

溪谷数ヶ所に急壁があり、昭和十年ダム建設の際道路橋梁の開通する迄は交通不便のため殆んど平地との交渉なく、昭和十一年未迄は義務教育すら免除されていた。標高六〇〇米の高地に位し、積雪は十一月より五月末に及び、現在水田二七町歩、開墾畑六〇町歩を有するが、これは大部分大正以降の引水工事による拡張で、水田の反当収量四俵弱、畑は白樺林の焼はらいが多く、四五度の急斜面をも利用してゐる。当然自給自足は不可能で、粟、稗、ソバ、或は各

秋山郷略図



種の郷土食を常食とし、冬期は狩獵、木工品細工を業としてゐる。明治以前は数度の饑饉により全滅或は離村するもの多く、部落の廢跡が二三見受けられる。間引きの風習もごく近年迄続いてゐた。明治以後は出稼ぎにより人口過剰の捌け口を見出してゐる。現在戸数一八五戸、人口約一二〇〇名、十名以上を擁する大家族も尠くない。最近五ヶ年平均の出生率二六・四、死亡率一〇・八で共に全国平均より少ないが、特に出生率は低く、従つて自然増加は少いのであるがそれでも自給自足は不可能である。

(2) 部落の歴史沿革

部落民は平家の子孫と称し、重盛にちなむ遺跡遺品が現存するが勿論明確でない。一説には奥州の阿部宗任の後裔同姓正九郎の末孫とも謂い、系図を秘藏し、阿部姓を名乗るものが多い。言葉の抑揚は新潟より長野に近いが、両者と異なる独特の古語も用いられてゐる。九部落中、中心の大赤沢、小赤沢最も古く、人口増加につれ南

北に拡大移住してゐる。勿論無医村で特有の迷信、治療法も残つて
いる。

少数の外来者を除き、全郷が数代に亘つて血族結婚を重ねたもの
であるがその全貌は明らかでない。判明且つ調査せる家系は二重イ
トコを含む三十一家系である。病歴の多くは胃腸疾患及び神経痛で
家系的に遺伝するらしくも見えるが判然としない。乳児死亡率は八
一・七、肺炎が多く、これも素質的な感じが濃厚である。精神病、
不具畸形等の遺伝疾患は若干あるが予想より少く、出生率と思ひ合
せて既に淘汰されたものと思われる。

調査成績

(I) 生体計測値

全調査項目二十八の中、主要なるもののみ列記すれば第一表の通
りである。之によれば身長は著るしく低く、沖繩其の他の南島住民
にも及ばない。従つて身長を構成する坐高、上肢長、下肢長も夫々
短い。特に足が短く、近代日本人の如き下半身の發育が見られな
い。身長に比して、胸圍体重の値はそれ程の遜色は見られない。頭
部は最大頭長のみ孤立して長い。他は総て短く、就中、最大頭幅
最小前頭幅等の幅が狭い。全頭高も可成り短く示されてゐる。概し
て云えば、軀幹全体が小柄で、幅も高さも小さいが、胸圍、頭圍等
の奥行きは普通の値で、その結果、ずんぐりした感じとなつてゐる。
最大頭長其の他、一般に標準偏差が大なる如く、分布が広いのみで
なく、その分布グラフに二つの山が見受けられるのが、特筆すべき
事柄である。(この二つの山については、家系遺伝の章において後述
する。)

体力に関しては握力、背筋力を第二表に示したが、体重の遜色な
きにも拘らず、筋力は男女共に甚だ弱く、殊に女の背筋力において

第1表 人類学的生体計測値

項目	男		女	
	実数	M±m (cm)	実数	M±m (cm)
身体	69	155.96±0.64	49	146.09±0.64
胸圍	56	50.75±0.40 (kg)	34	45.76±0.40
坐高	69	83.47±0.60	48	80.38±0.46
上肢長	69	83.88±0.44	49	79.03±0.40
下肢長	69	69.40±0.32	49	63.40±0.32
指長	69	83.75±0.41	47	78.76±0.43
肩幅	69	161.07±0.74	49	148.48±0.72
頭長	69	36.03±0.40	49	33.15±0.48
頭幅	69	55.16±0.33	47	53.39±0.41
前頭幅	70	19.03±0.85	49	18.17±0.79
小頭幅	70	14.98±0.61	49	14.32±0.57
額角	70	9.90±0.57	49	9.71±0.70
顔高	70	14.16±0.64	49	13.22±0.88
顔幅	70	10.59±0.64	49	9.94±0.70
形態	70	12.29±0.84	49	11.33±0.90
頭高	69	21.88±0.54	49	20.91±0.53
鼻高	70	5.43±0.42	49	4.91±0.67
鼻幅	70	3.70±0.34	49	3.33±0.32
鼻口	70	5.30±0.56	49	4.95±0.59

- (註) 1. 16満歳以上の成年のみについて。
2. 上ノ原和山両部落の体重測定を欠く。

第2表 体力測定値

項目	男		女	
	実数	M±m(kg)	実数	M±m(kg)
握力(右)	70	32.59±0.87	49	24.17±0.71
握力(左)	70	32.35±0.81	48	22.77±0.80
背筋力	45	37.06±0.77	21	4.97±1.23

(註) 1. 満16歳以上の成年のみ。
2. 背筋力計中途にて破損のため、測定人数少し。

第3表 血液型頻度

血液型	実数	%	
A	101	62.3	ウエーリツシユの頻度 p=4.373 q=1.110 r=4.517 民族示数 3.8 $\left(\frac{A\%+AB\%}{B\%+AB\%}\right)$
B	22	13.6	
AB	6	3.7	
O	32	20.4	
計	162	100.0	

著るしい。又、標準偏差の値によつても示される如く体力の分布に著るしくむらがある。これは単純劣性因子の分離と思われる。

(2) 観察値

(イ) 血液型

第三表に示せる如く、血液型はA型が六二%ととびぬけて多く、其の他の型が著るしく少く、その結果民族示数は三・八と大きい値なつてゐる。これは少数例による偏差もあらうが、むしろ同系遺伝による定着度と解釈し度く。

(ロ) 視力

大部分が電燈のない部落で、ランプの燃料も切りつめた生活にも拘らず視力のみは優秀で且つ、第四表に示せる如く、男の方が優れ

第4表 視力

	男		女	
	実数	平均値	実数	平均値
視力(右)	51	1.39°	47	1.29°
視力(左)	51	1.41°	47	1.31°
視力1°以上のものの頻度				
右	51	80.0%	47	85.1%
左	51	87.3	47	76.6
計	102	100.0	94	100.0

(註) 1. 満40歳以下のもののみについて。
2. 測定は石原氏視力表による。

てゐる。又視力一度以上のものが八割を占めてゐる。

(ハ) 色神

色神の頻度は第五表に示せる通りである。即ち男は色弱を含め赤緑色盲が二四%の高率となつてゐるが、女はわづか二%を超えない。赤緑色盲は伴性遺伝の定型的なものとして最も有名である。男の約四分の一近くの赤緑色盲により血族結婚の影響を充分窺知し得る。

(ニ) 眼瞼型

第六表に示す通り、二重瞼は男女天々七〇%、六〇%となつてゐるが、左右対象のものが多く、且つ家系的に遺伝する。

(ホ) 鼻孔型

第5表 色 神

色 神	男		女	
	実数	%	実数	%
正 常	71	75.7	61	98.4
赤緑色盲	12	24.3	0	1.6
同 色弱	11		1	
計	94	100.0		100.0

(註) 石原氏色盲表による。

第9表 眼 險 型

眼險型	男		女	
	実数	%	実数	%
二 重	64	69.6	35	59.3
一 重	28	30.4	24	40.7
計	92	100.0	59	100.0

(註) 1. 頭側、鼻側の不完全型も夫々含めた。
2. 60歳未満のもののみについて。

第7表 鼻 孔 型

鼻 孔 型	男				女			
	(成人)		(16歳未満)		(成人)		(16歳未満)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
高 型	10	14.7	—	—	3	6.4	—	—
中 高 型	27	67.6	3	33.3	17	74.5	4	50.0
中 低 型	19		6		18		4	
低 型	12	17.7	18	66.7	9	19.1	8	50.0
計	68	100.0	27	100.0	47	100.0	16	100.0

(註) 分類は Topinard 法の第3を更に二つに分つ。

第8表 顔 型

顔 型	男				女			
	(成人)		(16歳未満)		(成人)		(16歳未満)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
楕 円	12	17.9	2	11.1	10	20.8	2	16.7
卵 形	14	20.9	3	16.7	13	27.1	3	25.0
逆 卵	5	7.5	6	33.3	8	16.7	2	16.7
円 形	2	3.0	4	22.2	5	10.4	5	41.6
角 形	—	—	—	—	1	2.1	—	—
四 角	2	3.0	—	—	—	—	—	—
菱 形	16	23.9	1	5.6	7	14.6	—	—
僧 帽	1	1.5	—	—	—	—	—	—
逆 僧 帽	14	20.9	2	11.1	4	8.3	—	—
五 角	1	1.5	—	—	—	—	—	—
計	67	100.0	18	100.0	48	100.0	12	100.0

(註) Pösch の分類による。

第七表に依れば Topinard の分類による中型最も多く、低型高型の順である。鼻高の生体計測値(第一表参照)も低値を示してゐる。女は男に比して更に低い。

(ハ) 顔型

Poeh の分類に従つてその瀬度を第八表に示した。これに依れば男女共卵型楕円型等の丸顔多く、菱型逆僧帽型等の丸角移行型も見受けられるが、角型四角型等の角顔は皆無に近い。此の丸顔は前項の低鼻と共に古風な所謂「おかめ」顔を形成する。

(ト) 齒型

第九表に依れば齶齒は男五〇%、女五七%で都会に比して少いが反対咬合若くは切齒位置異常(特に上顎犬齒突出)の瀬度多く男六四%、女七九%に及ぶ。血族濃度に応じ、その遺伝により齒列異常が増す傾向にある。

(チ) ツベルクリン反応

時間の都合上注射後二十四時間の反応検査を行つたので、疑陽性が多いが、それを含めれば陽性率三九%となつてゐる(第一〇表)。陽性の集中状態は部落によつて異り、土地狭瘦の上野原部落が、都会地元の出稼ぎが多いため陽轉者が多い。

(リ) 其の他

初潮年齢は平均一五年七月、普通集団による平均値より八乃至一〇ヶ月遅い。吃音、腋臭等の遺伝が数家系見られた。左利きも若干あつたが、散発的で家系をたどつてゐない。

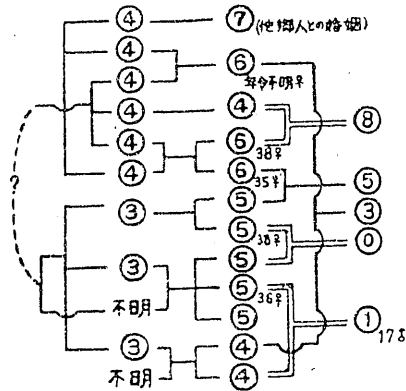
(3) 家系遺伝

第一章及び第二章において、秋山郷被調査者全家系を総括しての成績を述べたが、更にこれらが家系別、血族濃度別に如何なる遺伝経路をたどり、如何なる識徴が発現するかを追跡しよう。紙面の都合上、三十一家系全部について、述べることは後日に譲り此処では典型的な一家系のみを代表として選び、且つ主要な二三の項目につ

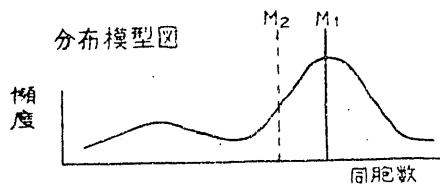
第9表 齒型

	男				女			
	(成年)		(16歳未満)		(成年)		(16歳未満)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
齶齒あり	32	49.2	9	33.3	25	56.8	3	18.8
齶齒なし	33	50.8	18	66.7	19	43.2	13	81.2
計	65	100.0	27	100.0	44	100.0	16	100.0
齒列正常	23	35.6	14	53.8	9	20.9	9	47.4
切齒反対咬合	22	33.8	5	19.3	15	34.9	4	21.1
切齒転位	20	30.8	7	26.9	19	44.2	6	31.5
計	65	100.0	26	100.0	43	100.0	19	100.0

第1図 同胞数



(備考) ○印は同胞数 傍数字は年令



第10表 Tubercrin 反応

反 応	実数	%
陽 性	2	4.9
疑 陽 性	14	34.1
陰 性	25	61.0
計	41	100.0

(註) 1. 24時間反応
2. 満16歳以上のもののみについて。

あるが稍多いと思われる。然るに第三代においては血族濃度のうすい婚姻による同胞数は五人及び三人と中庸の数を示してゐるにも拘らず、イトコ結婚三組にあつては、一組が八人、他の二組が○人及一人(この一人も既に年令十七で今後兄弟の増す可能性は極めて

いて示すことにする。

(イ) 同胞数

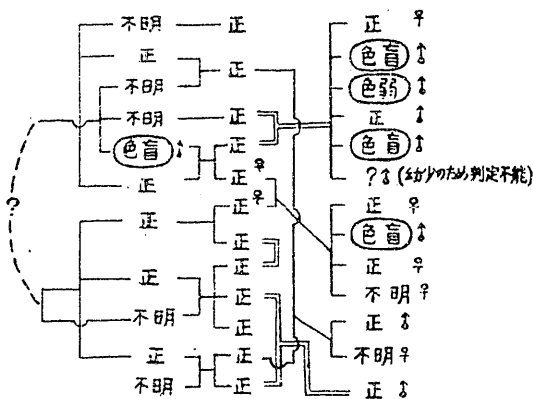
第一図によれば年代の古いため同胞数不明の家族員も若干あり且つ古い年代は正確を期しても乳児死亡等を計算に入れぬ誤差が生じ勝ちであるが、第一代は殆んど同数と見做し得る。第二代に至るも絶対値は増したが相互の比較は大なる変化は見られない。但し他郷人との婚姻(即ち混血)による数は僅か一例では

乏しいと判断し得る)と両者に数の開きを生ずる。第三代における妻の年令は図の書込みの如く三五才及至三八才で年齢による子供数の差は考えられない。三十一家系全部の同胞数の分布を見れば第一図の模型図の如く数の開きにより二つの山を生ずる(これは生体計測値一般についても云える)。而して同系結婚のない集団においてはM₁を中心とする山一つに終る所を、秋山郷にあつてはもう一つの小山が生ずるため平均値はM₂の辺にずれてその結果平均出生数の減少を来し、出生率にもその影響が現われるものと思われる。今埼玉県秩父郡久那村(血族結婚率六・七%)の妻と年令構成を同一にして平均出生数の比較を見れば、久那村の四・〇に対し秋山郷は二・八と一人以上の減少である。かくの如く出生力も同系結婚により影響を受け得ると謂えよう。

(ロ) 赤綠色盲

第二章に述べた如く、赤綠色盲は伴性遺伝型の典型と称される。第二図においても、この因子がない場合にはたとえイトコ結婚であ

第2図 赤綠色盲

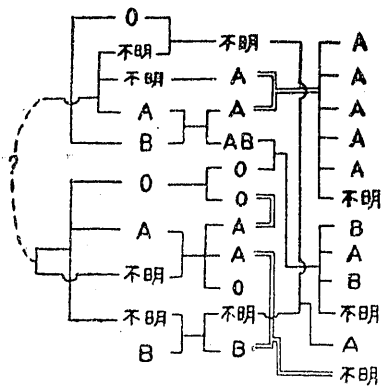


つてもこの劣悪形質は発現せず、反対にもし因子を有してゐれば、第二代が女なので潜在して現れないが第三代に至つて一人を除く全部の男に隔性遺伝をする状態を提供してゐる。

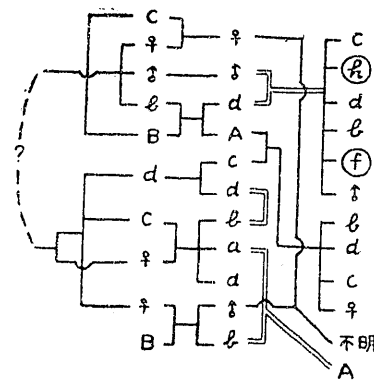
(ハ) 身長

男女別或は年齢別の差異を避けるため、昭和二十三年調査の厚生省公衆衛生局発表農村年齢別身長表⁽⁵⁾の夫々同一性、同一年齢の身長と比較し

第4図 血液型



第3図 身長



厚生省公衆衛生局調査 (昭和23年)
農村年齢別身長表との対照分類

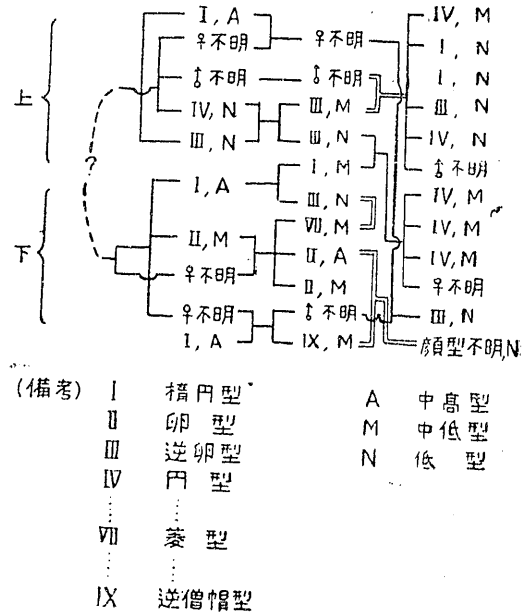
+ 2.0~4.0 cm	A
+ 0~2.0	B
- 0~2.0	a
- 2.0~4.0	b
- 4.0~6.0	c
- 6.0~8.0	d
- 8.0~10.0	e
- 10.0~12.0	f
- 12.0~14.0	g
- 14.0~16.0	h

て、その表より高いものを大文字、低いものを小文字で表わし、二種毎に段位を設けて家系表に書込んだものが第三図である。これによれば一般に(一)が多く、少数の(十)のものも四種を超えず、平均が短身となることは第一章生体計測値に示した通りであるが、図に見られる如く、イトコ結婚において、第一代第二代の精々B-dの範囲がA-hに拡大、稍々長身のものとしてこゝにも分布に二つの山を生ずる。而してイトコ結婚に非ざる一系はb-dに亘る中庸の極めて限られた範囲にあつてイトコ結婚と反対の分布を示してゐる。

(三) 血液型

血液型を图示すれば第四図の如くである。血液型の遺伝系統は従来の説の通りであるが此の調査ではA型の影響が強い。第二章血液型瀬度のA型が六二%の高率を示す所以である。

第5図 顔型及び鼻孔型



(ホ) 顔型及び鼻孔型

顔型及び鼻孔型についてはまとめて第五図に掲げた。

元来顔型も鼻孔型も共に性別年齢別に差異あり、混同比較することは危険であるが、各代夫々年齢は大体同様であり、婚姻による遺伝系統のみを見る分には差支えないと思う。これによれば顔型については、上家系はI、II等下顎幅の張つた型が多く、下家系にはIII等頭幅観弓幅等の広い型があり時にはそのため菱型も見られる。その混血はすべて中間型のIVとなる。これに反してイトコ結婚はIよりIVまで分離する。鼻孔型は、年齢の相異もあるが低くなる傾向にある。それも血族濃度の濃い薄いによつて区別が明瞭である。即ち第一代第二代にあつたAは第三代に消失し上下家系混交の兄弟はMであるのにイトコ結婚はNが圧倒的である。鼻高低下因子は同系結婚により発現瀬度が増すと云い得る。

(4) 地域的差異

農に全部落の歴史沿革を述べるにあつて秋山郷の中にもその発

第 11 表 地域別計測値

	部 落 名	実数	身 長	最大頭長	握 力
N ↑ S 男	結 東	12	156.9cm	18.8cm	36.1kg
	前 倉	6	154.0	18.6	34.1
	大 赤	12	154.4	19.3	32.6
	小 赤	26	155.6	19.1	30.3
	上 ノ	8	157.2	19.0	33.8
	和 山	6	159.7	19.2	34.4
	全 郷 合 計	70	156.0	19.0	32.5
女	結 東	7	145.2	18.1	24.7
	前 倉	3	144.8	18.2	23.0
	大 赤	4	144.5	18.7	22.6
	小 赤	23	145.0	18.2	21.4
	上 ノ	12	148.9	18.2	23.0
	和 山	—	—	—	—
	全 郷 合 計	49	146.1	18.2	23.5

(註) 1. 満16歳以上のもののみについて。
2. 和山部落は女子計測なし。

展に従い開拓に新旧の相異があることに触れたが、各部落相互間に婚姻交渉が度々あつて平均化されてゐる可能性は勿論あるにしてもイトコ結婚の瀬度より推して、尙大赤沢等の発祥部落は血族濃度が濃く、その南北に拡大した発祥部落は濃度がうすいことは明らかである。今、実数は更に少数例となるが、部落別に主要なる二三の項目を選びその平均値を比較検討して見よう。

その値は第十一表に示す通りであるが、実数が少く且つ年齢構成が同一でないのでその大略を述べるに止める。発祥の中心地で血族

濃度の多い大赤沢、小赤沢において身長、握力が低くそれより南北に拡がるにつれ大となる。最大頭長のみはその逆で南北に拡がるにつれ小となる傾向がある。第一章の生体計測結果について述べた如き、最大頭長を除く値は概して貧弱で且つ体力も著るしく劣ることは、かくの如く血族濃度に応じてても云い得るであつて、この事は山梨県西山部落の血族結婚調査の部落別計測結果と全く同一の傾向を示してゐる。

(5) 智 能

日程の都合上、直接的智能検査は実施しなかつたが、部落兒童の学習態度を分教場教師作成の成績表によつて見れば、概して優れた学科の才能なく、気が小さく積極性に乏しい態度で、且つその中にも真面目だが頭脳回轉のにおいものと人真似はうまいが注意力が散漫なものとの二通りに分けられる。勿論この成績表によつてのみ智能程度を判定することは速断にすぎるが、その一端は窺知し得よう。

結 語

- 以上の結果を総括要約すれば、
- 1、血族結婚部落民は最大頭長以外は全体として体格体力の劣つてゐる部分が多く、特に身長、筋力において著るしく、偏差、分布に特殊の徴候を示す。
 - 2、血液型、顔型、齒列等は劣性遺伝因子発現によつて偏り、赤緑色盲の発現瀬度も著るしい。
 - 3、これに反し、視力の例の如く、悪質因子のないものは、血族結婚の悪影響は現れてゐない。
 - 4、血族結婚による各種の発現徴候は系統別地域別共に、その血族濃度に応じ増減する。
- 等の事柄が結論出来る。

何れにせよ、悪質遺伝因子がもし存在するならば、その形質が普通の結婚なれば潜伏消滅も可能なる筈を血族結婚によつてホモ化され、それを繰返すことによつて身体各所に対する悪形質の発現を容易ならしめることは血族結婚が身体的に好影響を与えたとは云い得ない。精神病其の他の重大な徴候は淘汰により殆んど見当らないが、個々の徴候は依然残つて身心を構成してゐるのである。而してこれ等は乏しくきびしい氣候風土食糧其他の環境のせむばかりとは云い切れなす。

先にも述べた Stern の言によれば、単一優性因子に対する淘汰は二分の一でも、その因子の数は三世代で元の十分の一以上に減少する(事実秋山郷でも骨軟化症其の他、優性遺伝の発現形質と思われれるものも二三あるが、その数は少い)がホモ接合体の劣性遺伝因子の場合は前者程簡単には淘汰が不可能で、もし元来一%あれば十世代後も尙元の数の四分の一存在し〇・一%に減少させるためには実に二十二世代を要すると。我々の周囲に一割以上の血族結婚が存在し、悪質の劣性因子が潜伏運搬されてゐる以上、一旦これをホモ化すれば、その淘汰はたとえ人工的に留意しても容易でない。環境もその発現の全てを支配出来ないのである。

これにより、優秀なる遺伝形質が多く他の二三の劣悪形質のマイナスを打消すに足るものがあれば別として、一般には血族結婚が優秀なるホモ化を結果する事よりも劣悪なるホモ化を招来する可能性の方が多いことを物語るものであらう。

参 考 文 献

- (1) 福田邦三 民族衛生誌 16巻1号 昭和24年
- (2) Sanders Genetica 20. 1938. (福田氏人類遺伝学概論より引用)
- (3) Stern, C. Science Vol. 110, No. 2852 1949.
- (4) 篠崎信男 人類学誌 60巻3号 昭和24年
- (5) 厚生省公衆衛生局 衛生統計誌 2巻2号 昭和23年

血族結婚について

わが国においては血族結婚といわれるものが欧米諸国にくらべて現在でも非常に多い。わが国の血族結婚の総婚姻数に対する割合は一般に全国平均で五%ぐらいといわれているが、この数値は実際には低くすぎるように思われる。地方の小都市でもいとこ同志の結婚は五%に達し、農山村にゆくと一四%にも達しているのである。更にいとこ半とか又いとこなどの結婚も含めると、都市でも一〇%を超えるし、農山村では二八%にも及ぶのである。

なぜこう血族結婚が多いかという社会的条件を分析してみるといろいろのことが考えられるが、血族結婚の成立には少くとも個人を中心とした結婚観は稀薄で、家とか、財産の分散防止とかいう目的が大きく支配しているようである。もちろん気心がしれているから安心だというような人間的な心理もないわけではないが、それは単に附随的な傍因にすぎない。いずれにせよ我々はこの血族結婚というものを、社会学的立場から、また優生学的立場からその他あらゆる観点から大きく取りあげる必要があるといえよう。また人口問題の立場からいろいろの点で問題となる。とくに出生力の研究には又とない適当な材料となる。

人口問題研究所では過般全国府県に対し血族結婚部落の有無とその実情について問い合わせを行つたが、解答のあつた二十三府県中十五県までそのような特殊部落について報告している。これは部落全体が血族結婚の集團といつてよいような特殊部落ばかりであるが、そのような特殊部落でなくても単に血族結婚が多いという村落はなお多数存在することが想像される。しかしこれらの特殊部落も将来は次第になくなつてゆくであろうから、その調査は今日の人口生物学者にとつては緊要の研究課題でなければならぬ。

(篠崎記)